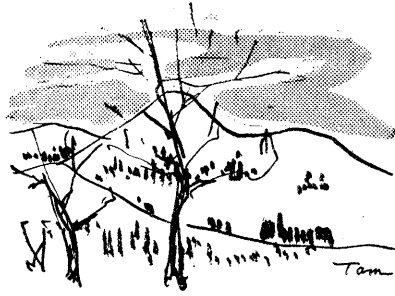


P T A 観 察 記



北 川 台 輔

その他の宗教を加えて、とにかく何かの宗教信者だと自称する者は今日米国民の過半数なのであるが、その残りはどういうことであるか。厳密に調査すれば宗教の感化のもとに生活する成人、そのもとに成長する学童は比較的に極めて少数である。だから頭のいい悪人、智慧を用いる犯罪人、技術を悪用する無礼漢が、年齢の差を超えて増加して来た。近年少年少女の犯罪がその数量に於ても實に於ても程度に於ても実に戦リツすべきものあるを見るようになって来たのである。

このやうな否定しようとしても否定出来ない事実の前に討をせはじめた。その結果米國憲法の指定する祭政分離の原則を超えないで、市民公民としての道德教育を、否、もっと根本的に言つて眞に人間としての品性を養成する教育をするのには、之までの諸科目を夫々に独立した専門の技術知識として修得せしめるのではなく、夫々の独自性は之をハッ

キリ認め乍ら、すべてが人間としてまた市民として生きるという一点に於て綜合され融和されたものとして、身につけられるよな教育をしなければならぬということになって来たのである。当然至極のこと言はなければなるまい。

そこで考え出されたのが前述した Common Learning (普通教育とでも訳すか)である。それは方法的に言つてハッキリしたのを持っていないようでもあるが、要するに例へば米國の歴史を学び乍ら、そこに必然的に出て来る政治家、科学者、文学者、探検家、実業家、事件等々を取り扱いつつ、色々な科目を学び、米國が今日ある所謂のものを知ると同時に米國の明日をして如何あらしめるべきかに就いて学童が自覚を持つよう仕向けて行くという行き方なのである。或は又その時々々の社会問題の一つをとりに上げて、そこに含まれている色々な要素について調査することによって自然科学、人文科学の諸部門の健全な教育をしようというものである。

之は我々素人が言うまでもなく専門の教育学者達が社会の現状に即し、児童の心理の實際に鑑みて到達した教育法なのであって、その健全性を誰でもが直ちに認めそうなるものであるが、仲々どうして之に對

所で理窟の上では教会と学校と言はば分業で学童の品性教育と知識技術の教育とを相並んでやつて行けるとしても、事實は仲々そう行かない。義務教育の制度は法律で定められているが、宗教の方はそうしたことがない。信教の自由は之を保証し又保護するけれども不信の自由も之亦認められている所である。キリスト教、ユダヤ教、

する反対が相当なものには驚いた。而もそれが無学文盲のわからず屋ではなく、大学の教授もあれば屈指の実業家もあるというようなわけで、仲々あなどり難い勢であった。諸学の専門家は普通教育では専門教育の基礎が出来ないと行って反対し、普通の人は嘗て自分達の受けた教育が悪いものでなかったから今の学童達にもそれだいい筈だという議論にもならないような議論なのである。

右のような議論紛々としてやまない事態に処するに公立学校当局は如何なるか。州の視学官は市の視学官に対して命令する権限がない。市の視学官は市の Board of Education の協賛を得ないでは何も実行に移す権利がない。ボードは之市民の選挙したものであるから一般市民の与論に支配されざるを得ない。而して一般市民の与論は誰が之を支配するかといえれば結局声を大きくして納税者の弱みにつけ込む人々である。多くの場合事の真相を知り善悪正邪の判断のハッキリついている人々は黙っているものである。何か前例のない新らしい事が起って来ると大多数の人はその善悪正邪を自分で判断しようとの努力をせず、誰かが判断をして呉れるのを空だのみして待つもの

らしい。そこをねらって事毎に反対し、進歩するよりも旧態依然として停止状態にあることを望む反動家達が、あることないことを並べ立、新方針の危険を針小棒大に誇張し、之をやかましく叫び立て、衆人の注意を呼ぶというわけだ。而して究極のねらい所は新らしい方法は新らしい設備その他を必要とし結局当校経営の費用がかさみ、従って納税者の負担を増加するぞというおどしにある。之で面白いことは人は誰でも自分を余り悪いとは思っていないものだから、『我々をして今日あらしめた過去の学校教育はそんなに劣等なものでなかった筈だ。その証拠に皆夫々に社会の尊敬する市民となり不動産の所有者となり、この市の脊骨を成しているではないか。若し我々にしてかくあり得るとすれば、我々の子供でても、同じ教育で立派に成功出来る筈だ。敢て費用をかけて目新らしいことをするには及ばぬ』というような論法を以て迫られると余程信念のハッキリと固った者でない限りすぐに降参してしまふ。税金は誰一人として多くを望む者はないわけだから、つい反対派の方が多勢に無勢で勝利を得るといふことになるのである。

このような実情なるが故に学校側では学童の父兄に積極的に働きかけないでは何

一つと言つていい程に何も出来ないのである。父兄達は今直接に自分の子供をその学校に学ばせているのだから、学校の教育方針について直接関心を持つてゐる筈だし、また市民層の相当大きなかたまりを形成するものでもあるから、現在々々中の父兄を学校側の味方にするという事は大きな力である。

ところがこの父兄会を内容的に充実したものにすることがまた以て仲々容易なことではない。自分の子供の教育を真剣に考える親が果して何程あるかということが疑はれざるを得ない実情である。学童の親だからと言つて必然的に P.T.A. の MEMBER になるわけではない。MEMBER になつて会費を納めたからと言つて仲々例会にも顔を出すまでには行かぬ。そのようなわけで教育の問題について諸方面からの観察やその結果を学童の親達に理解出来るように伝達するということは並大低のことではないのである。而してこの様な難事を、それだけでなくさえも過重労働を強いられる先生達に任せせることはしようとして出来ないことである。

そこで結局、少数でもとにかく P.T.A. の MEMBER の中から特志家が時間と労力とを無償で提供して、P.T.A. の会員を増加せし

めるように勧誘し、例会の出席を多からしめるようにそのプログラムの作製に苦心し教師達と父兄達との間に意志の流通を欠かないようにたえず連絡の勞をとり、学校側が真剣に学童の為に骨折って呉れる所を、先づ父兄に、そして彼らを通して一般市民に理解せしめ、その支持を得るように努力しているわけである。それは花やかな仕事ではない。また花火線香的に一時にパッとやって結論を見ることの出来る性質の仕事でない。併し乍らそれは若しも誰もしなかつたとしたら、折角公立学校があり、その中に良い先生がいて真剣に教育に當って呉れようとしても、その効果を半減して余りある程に重要な切実さをもった仕事なのである。

私の住む町では夫々の学校のPTAがあるばかりでなく、各学校のPTAを総まとめにした市のPTA聯盟があり、その聯盟では毎年色々なプログラムを作って各学校のPTAの内容を充実せしめることに腐心している。自分達の税金で設建し運営して行く公立学校をよくし、そこで学ぶ自分達の子供達が、自分達の次の時代によき市民として社会の公民として成長するようにするのは、結局父兄をはじめ一般市民の協

力を得なければならぬ。学校の教師にまかせ切りではいけないのである。一体誰が学童を教育するのであるか。それは彼らを産み彼らを育て彼らに将来を托そうとしている彼らの親とその属する社会である。学校も教師も社会が学童教育の為に、極端に言へば、使用する所の用具である。之を最大限度に活用して効果を上げしめるのは結構社会そのものであり、市民達自身であるのである。此の意味に於てこそPTAの意義を理解すべきである。

以上PTAに就いて考察した所は米国のような自由民権の原理に立つ社会の有ゆる側面にあてはまることである。自由社会に於ける自主なる市民とは所詮その社会の一切に関する責任を負う意志と能力とを有するものでなければならぬ。それが即ち

The government by the people, of the people and for the people という言葉の意味内容なのである。政治を政治の専門家に一任してはおけないのである。市民が『選挙する』ということは市民がその最後の一人に到る迄政治に参与すべきことを意味してをるのである。それは国全体を通じて行はれる大統領の選挙をはじめ町々村々の町会村会の議員に到るまで同様である。

村の道路の改良から衛生資設のこと、学校の問題、その他何でも村民一般の福祉に係ることは村民全体の与論によって決せられなければならない。村会は村民の与論によって村政を運行して行く筈である。村長や村会議員が無能であつたり誠意がなかつたりするとすれば、結構そんな人物を選んだ村民が悪いということになる。またどんなにいい人物を選んでも、選び放しではいつの間にか悪の力に押されて、個人的には好い人物であつたにせよ公僕としては一部の人人々の圧迫に敗けてその先棒にかつがれないとは限らない。だから村会をして真に村民全体の福祉の為に貢献する者たらしめる為には村民全体が年中村政に関心をもち、自分達の選んだ代表者をして善処せしめるよう心掛けていなければならない。

デモクラシーが本当にその名にふさわしい実行力を持つのは仲々容易なことではない。政治機構だけをデモクラタイズしたばかりでは却ってデマゴグの独ダン場となる可能性が頗る多い。というのは政治のことを何もわきまえない愚民の衆が投票を以て最後の決定権を持っている以上、彼らを或はおだてて或はおどし、或はだまして以てデモクラシーの旗印のもとにデモクラシーの機

構をそのまま用いて正々堂々と悪党が自己の私利私慾をみたして行くことも出来るのである。だから自由社会の自由市民たる者は一人々々ハッキリとした道徳的批判力を持ち、社会一般のことについて関心を持つと同時に、責任を以て善処する意志と能力とを持ち、必要とあらば敢然立って悪に抗し、正義と人道の爲には犠牲を惜しまず戦うだけの心構えを持った者でなければならぬ。

前回に述べた如く、アメリカの社会には文明の国デモクラシーの国であるにも拘らず、極めて野蛮な非デモクラティックな人種の偏見とそれに基づく差別待遇が今尙跡を絶たず、識者の心を痛めているのであるが、之なども大多数の人々が安逸にふけている間に少数の悪党がお人好しの民衆をひっぱり廻しているからに他ならない。而してここに所謂「お人好しの民衆」の中には上院議員もあれば下院議員もあり、牧師もあれば大学教授もあり、大実業家もあれば労働組合の指導者もあり、医者あり弁護士あり軍人あり農夫あり商人あり労働者あり男あり女ありで、こんな立派なそして教育のある人かと思はれる程の人が、人種問題に関する限り小学校一年にも及ばない位に幼稚な考へしか持っていないことも屢々

あるのである。そのような人々は腹黒い悪党の宣伝にすぐ乗せられて自分達の社会に百年の害を及ぼすようなことを不知々々の間に自分の投票を以て敢てしている始末である。

此の様な政治の貧困が今日の米國には否定出来ない事実なのであるが、之を如何にして改良するかという問題になると、亦やっぱり市民一般の自覚とその実行力に依つて他はないのである。そこで教育の問題に拘らずその他如何なる事であっても、社会一般の爲になる事を実行に移そうとする場合には必ず有志が協力して与論呼び起し、又之を善導して遂に具体策として実行出来る所まで運ぶ勞をとらなければならぬいわけなのである。何事も「お上にまかせて」おくことは出来ないし、政治の専門家に一任しておくわけにも行かないわけだ。かと言って各人が夫々に孤立して勝手な方向に動いていたのでは、統一のとれた悪の力にも二も三もなく敗北してしまはなければならぬ。だから結極自由社会では有識者自由人が、人に強いられてではなく自発的に、信念と理解を以て他と協力一致して団体行動をとることの出来る人物でなければならぬ。之を以て米國人の所謂ヴォランタリズムというのである。即ち各人が社

会人として善惡正邪を判断し得るだけの道徳的標準を持ち、原理原則をわきまえ、主義と信念とを以て立ち、必要とあらば百万人をも恐れず独りで進むことも出来、また時には他の人々と真に協力一致することも出来る者このやうな人をこそ自由人と言うのである。

学童をしてこのような社会人として成長せしめる爲には米國現在の公立学校も大いに改良の余地があるわけだ。教育は之を政治問題化してはいけなしいと言ひ、宗教家や教育者は政治に関係してはいけなしいと言つても、事實は教育もそれが公民の教育である限り社会人一般の責任であり、その限りに於て政治と切り放しては考へられないのである。それをそうとハッキリ認識してデモクラシーの政治体制を活用して教育の改善を計ると共に政治の純化を実現し得るよう努力すべきものである。かくの如く考へて来ると一小学校のPTAと雖も実に大きな使命を持ち意義を持つものなのである。

★  
★  
★

☆  
☆  
☆